

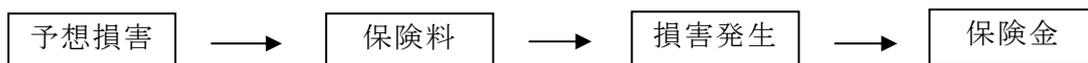
大学と損害保険 ③

～大学教職員の基礎知識としての《保険のはなし》～

有限会社国大協サービス 事業部次長 藤井昌雄

保険をいくら掛けるか？（火災保険の場合）

前回、保険は、簡単に言えば、予想される損害に、保険料を支払い、損害が発生したら、保険金を受け取る経済制度だとして説明しました。



それでは、予想される損害はどのくらいで、保険をいくら掛けたらよいでしょう？

保険をいくら掛けるかということは、「保険金額」をいくらに設定するかということです。「保険金額」とは、保険契約において設定する契約金額のことをいいます。ところが、一般的には「保険金額」と聞くと支払われる保険金の額を連想してしまいます。保険契約の打合せの時などには、慣れるまで意識して注意する必要があります。

時価と新価

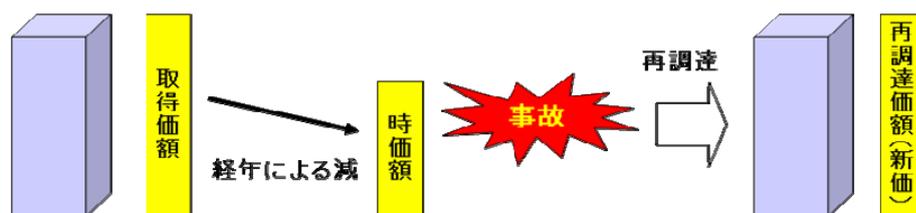
火災保険の例で考えてみましょう。

火災保険を掛けるということは、まず火災保険の対象となる家や家財が存在するという事です。保険の世界では、保険を掛ける対象となる財産のことを「保険の目的」と言います。この言葉も要注意です。保険屋さんで作った文書の中に「保険の目的」とあるのを読んで後頭部に違和感を覚えた人もいるかと思いますが、この場合の「目的」とは purpose ではなく object です。

保険の目的、つまり保険の対象となる家や家財の価値は、金額により表すことができます。それを価額と言います。保険の目的の価額は、買った時の取得価額から使用によりだんだん下がると考えられます。経年による価値の減少を差し引いた価額が「時価額」です。

しかし、実際に事故が発生して同一の財産を再取得しようとする基本的には買った時の金額が必要になります。これを「再調達価額（新価）」と言います。

火災保険の契約では、保険金額の設定は、時価額による時価方式と再調達価額（新価）による新価方式の二つの方式がありますが、時価方式では、事故が発生して保険の目的を再調達する際には保険金だけでは足りませんから、新価方式で契約するのが基本です。



保険をかける対象 → 「保険の目的」という

「再調達価額」(新価) → 保険の目的を再取得するために必要な価額
基本的には取得価額(調整が必要な場合は新価係数を乗じる)

時 価 → 取得価額から経年による価値の減少を差し引いた額

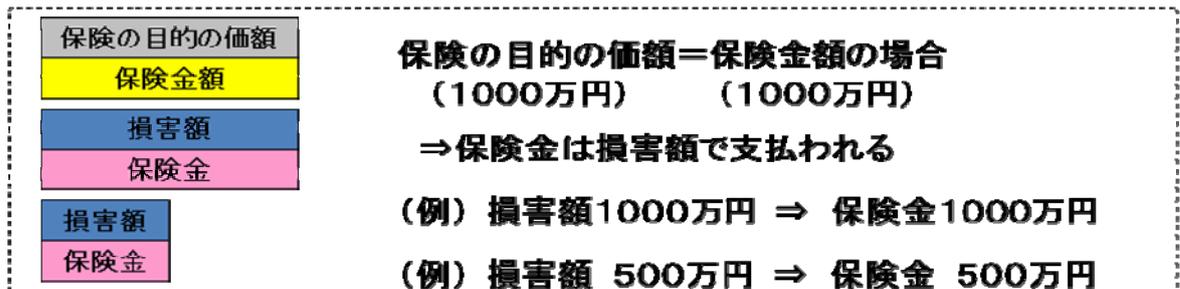
再調達価額(新価)により保険を掛けるのが基本

保険金額の設定

それでは、保険金額の設定はどうしたらよいでしょう？

基本的には、保険の対象となる家や家財の再調達価額と同じにすればよいわけです。

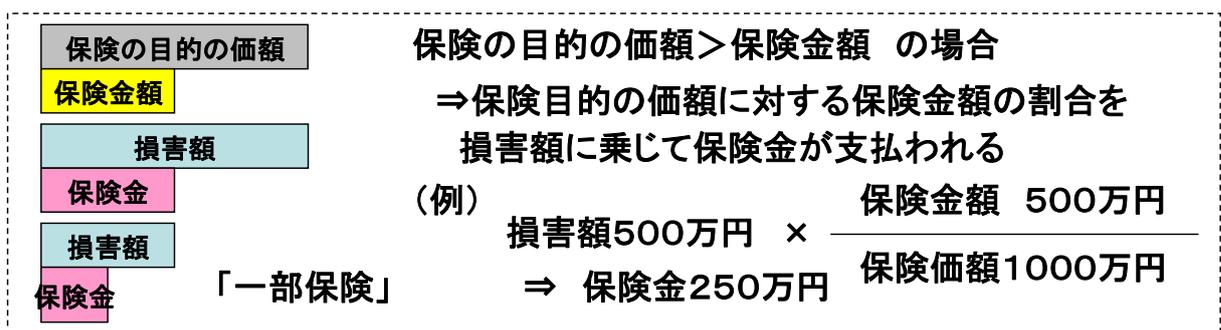
例えば再調達価額（新価）が1000万円の家があったとすると、保険金額は1000万円に設定します。この場合、仮に、全損事故が発生すれば1000万円の保険金が支払われ、500万円の損害の事故が発生すれば500万円の保険金が支払われます。



ところが、保険金額は契約上設定する金額ですから任意に設定することができます。上記の例で保険料を安くしようと思って保険金額を500万円を設定したとするとどうなるでしょう。

全損の事故が発生した場合には、そもそも保険金額を500万円にしているのですからそれしか出ないとあきらめることとなりますが、損害が500万円の事故の場合はどうでしょう。この場合には、本来の家の価額である1000万円に対して保険金額を半分の500万円で契約しているのですから、価値の一部にしか保険を掛けていないことになり、保険の目的の価額に対する保険金額の割合に応じて保険金が支払われることとなります。この例では、保険金は250万円しか支払われないこととなります。このような保険金額の設定を「一部保険」といいます。

保険金額は保険の目的の価額（＝再調達価額（新価））とすることが基本です。



保険金額＝再調達価額(新価)にすることが基本

(注) 上記の例は基本的考え方を示したもので実際の保険金の支払額とは異なります。

次回予告
クイズ

ケガをして病院で治療し2,500円を支払いました。
通院1日5,000円の傷害保険に加入しています。
保険金はいくら支払われるでしょう？